

「今の中国」がわかる本（漢字からみた中国の人の考え方）

（三井物産戦略研究所中国经济センター長：沈才彬、

知的生き方文庫、三笠書房、2007年）

歴史的にみれば、朝鮮戦争のときに中国はアメリカと直接戦ったこともあり、アメリカに対する中国人の感情が厳しい時代もあった。しかし、その感情が最悪のレベルまで行き着くことはこれまで一度もなかった。その背景には、アメリカは中国を侵略したことがなく、中国本土で戦争をしたこともないという事実がある。確かに朝鮮戦争では、中国とアメリカはお互い敵対する関係だったのだが、この戦争は結果的に両者引き分けに終わっている。朝鮮戦争で、アメリカは中国に勝つことができなかった。アメリカはそのことを率直に認めている。そのため、中国人には、アメリカは事実を率直に認める国だという認識がある。そういったアメリカ人のフェアな部分を見て、自然発生的な感情として、中国人はアメリカに敬愛の気持ちを抱いているのだ。一方、アメリカも中国にたいして敬愛の念をもっている。中国を歴史ある国だと捉え、さらに自国との戦争にも負けなかった国という認識がある。朝鮮戦争が引き分けに終わるまで、アメリカにとって勝てなかった戦争はない。そうした“輝かしい戦歴”をくじいたのが中国であり、いたずらに中国と戦ってはいけないという感情がある。中国とアメリカはお互いを好敵手と考えており、一目置く存在だと認め合っ

いるといえる。アメリカに敬意を払う中国人の気持ちは、アメリカを意味する中国語にも表れているといえるかもしれない。日本式の漢字でアメリカを表すと、「亜米利加」となり、省略すると「米国」となるが、中国語では「美利堅」と書かれ、省略すると「美国」となる。つまり中国語ではアメリカは「美しい国」と表現される。さらに、中国人はアメリカのことを「老美」と呼んだりもする。「老」とは、目上の人を敬うときに使う敬称である。(p 25～)

列強が中国を侵略していた当時でさえも、アメリカは単独で中国を侵略することはなかった。アメリカは当時、スペインと戦争中で、中国を侵略する余裕がなかったといえればそれまでだが、歴史上、アメリカが単独で中国に侵略したことはないという事実が変わりはない。国共内戦の際、国民党を援助していたアメリカだが、国民党が台湾に逃げていったあとも、そこにアメリカの軍事基地を置くようなことはしなかった。唯一アメリカが中国に兵を進めたのは、1900年の義和団事件の時だ。このときアメリカは8カ国連合軍として義和団事件の鎮圧に関わり、当時の清王朝から4870万円という多額の戦争賠償金を受け取った。しかし、アメリカが他の国々と違っていたのは、自国の軍隊派遣費用と、アメリカ人ビジネスマン、キリスト教伝道師への賠償を差し引いたあとの残額である1670万円をすべて中国に返還したことだ。ただし、直接返金したのではなく、返

還金を使って中国にアメリカ留学予備校・清華学堂を設立した。この学校がのちの精華大学となる。清華大学といえば、胡錦濤国家主席をはじめ、朱鎔基元首相などが輩出した中国の超名門大学で、当然のことながら、この大学には親米感情が色濃く残っている。この戦争賠償金の一部返還を提言したのは、当時の、イリノイ大学のジェームズ学長で、「中国自身が支払った賠償金を還元するというかたちで、中国の若者たちを教育することができれば、精神面とビジネス面において将来的にはアメリカにとって大きな収穫になるだろう」と考えたというのだ。言い換えれば、知識と精神をもって将来の中国の領袖たちを支配する方式をとるべきである、というのがジェームズ学長の戦略であった。その提言を受けてセオドア・ルーズベルト大統領は、1907年12月3日、議会での演説の中で、「われわれは自らの実力をもって中国の教育を支援し、この繁栄の国をして徐々に近代的な文化に融合させるべきである。支援の方法は賠償金の一部を返還し、中国政府をして中国人学生をアメリカに留学させる」と述べた。翌年5月米国議会は決議案を採択し、賠償余剰金を中国に返還し、アメリカ留学予備校の設立を実現させた。いずれにしても、こうした長期戦略に基づいて行動をとるアメリカという国は、率直にすごいというほかない。米中間には、このようなあまり知られていない関係があることも事実なのだ。

(p 27～)

.....

中国と日本の間には、千数百年以上にわたる交流の歴史があり、距離的にも両国は非常に近い。古来さまざまな中国文化が日本に到来し、それらが日本文化と融合した結果、いくつもの素晴らしい文化が日本で花を咲かせた。こうした背景があるためか、または同じ東洋人として外見が似ているせいか、日本人は中国人も自分たちと似たような感覚をもっているはずだと考えてしまう傾向がしばしばあるようだ。ところが、こうした思い込みは、相互理解のためには逆に邪魔になる。中国人を正しく理解するためには、この考え方は捨てたほうがいい。たしかに日本と中国は漢字文化を共有している。しかし、この漢字をとってみても、中国で使われている漢字と日本で使われている漢字とでは意味がまったく違うことも多い。たとえば、「手紙」という言葉があるが、日本語と中国語では著しく意味が違う。手紙は日本では「レター」を意味するが、中国語では、「トイレットペーパー」を指す。そのほかに、「娘」は日本では一般的に「お嬢さん」のことを指すが、中国では「お母さん」を意味する。(～ p 47)

.....

1840年のアヘン戦争から1949年の新中国誕生までの約100年間は中国の国民にとっては地獄のような屈辱の100年だった。中国にとっては亡国の時代であり、みじめな時代だったのだ。そういった歴史が

あるため、中国人の中には被害者意識が強く残っており、この意識は新中国誕生以降にも受け継がれていくことになる。(～ p 89)

.....

腐敗の「腐」という漢字は興味深い文字で、政府の「府」の字の下に「肉」がついて、「腐」という漢字になっている。この文字が作られた当時、肉は高級食材で、役人への賄賂用の品物として使われていたらしい。そのことから、府（役所）が肉（賄賂）とくっつけば必ず腐るという意味から、この漢字が作られたというのだ。(～ p 167)